

## 井上神父の言葉に出会う（４１）

### ○ アッバ神学とパウロ主義

そこで私は、『新約聖書』を構成している書物を、すべて賛成であれ、懐疑的であれ、ともかくパウロの立場を中心課題として理解していこうとするサンドメルの見座を自分のものとすることによって、初めて、着地できずにとめどない飛行をくり返さざるをえないように追いつめられていたパイロットの焦りと悩みのような心情から脱けて、地上着陸を決断しえたというわけだったのである。（井上洋治「風」第八〇号、一四頁。著作選集5、八一頁所収）

本稿第三部＝新刊『「南無アッバ」への道』では、『ルカによる福音書』一八章のく「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえを巡って、井上神父の神学――「アッバ神学」の特徴を見てきました。

その最終章では、井上神父がサンドメルの『天才パウロ』（The Genius Of Paul）から「目からうろこ」の体験をし、それ以来、「パウロの立場を中心課題として」新約聖書を読む、という視点が与えられて書いた、という『キリストを運んだ男』を取り上げました。このサンドメル――パウロとの出会いが、「風の家」設立への推進力になったのでした。

わたしは連載原稿をきっかけに、まず日本語訳として出ているサンドメルの『ユダヤ人から見た新約聖書』を、続いてインターネットでアメリカの書店から当の『天才パウロ』の復刻版を手に入れて読みました。これらを読み進んでいくうちに、わたし自身もパウロの思想にあらためて興味が湧いてきました。

パウロ思想はさまざまな要素や方向性を持っており多面的です。ときには真性パウロ文書と考えられている七つの手紙の間でも、一見矛盾するような思想が見出されます。

わたしは、二〇一二年八月、三鷹のお部屋におじゃまして、直接井

上神父と話したとき、「『パウロを中心課題とする』というのは、具体的にパウロのどういう思想を指しておっしゃっているのですか」と聞いたものです。そのとき神父は、「これ」と一つに限定することはありませんでした。

しかしわたしとしては、いわゆるパウロ主義(paulinism)の中心は、何といっても彼の「信仰義認論」にある、とっていましたので、その方向でルターの『キリスト者の自由』なども読み返したわけです。

### ○ 青野神学との出会い

そうした営みのなかで最も大きな恵みだったのは、パウロの「十字架の神学」の研究で知られる青野太潮氏の論説との出会いでした。わたしは氏によるパウロの「信仰義認論」の解説によって、アッバ神学への理解を、より深めることができたように思います。

くとくに『ローマの信徒への手紙』四章五節を中心にパウロの「信仰義認論」を語る青野氏の考えは、アッバ神学を補強してくれるもののように思います。というのは、右に述べた意味での「信仰義認論」——「人をダメにしてしまうかもしれない可能性を持つ程に無条件で徹底的な神のゆるし」(『「十字架の神学」の成立』三六四頁他)、「しかり」を与える神を信じるということは、まさに「アッバ」と呼ばれるにふさわしい母性原理の神に信頼することだからです。>(『「南無アッバ」への道』三一四頁)

わたしはこのように書いたのですが、青野神学と井上神学は母性原理でつながる、という自分の解釈が正しいかどうか、やはりどうしても確かめたくなり、実は次のようなメールを青野氏本人に直接送らせていただいたのです。抜粋します。

<青野太潮先生、

……青野先生の『どう読むか、聖書』(朝日選書、一九九四年)をはじめ読んでときは、自分なりに考えて正直ピンとこない部分もあったのですが、贖罪論一辺倒のキリスト教に抵抗を感じていたので、こ

ういう捉え方もあるのかと、大きな励ましを受けました。

それからずいぶん時が経ち、たまたま、先生の近著『「十字架の神学」をめぐって』（新教新書、二〇一一年）を読む機会があり、「これは！」と改めて感心した次第です。

とくに感銘を受けたのは、東日本大震災にまつわる神義論への青野先生の切り口についてでした。先生の「人間（信者）の生は、十字架につけられしままなるキリストに倣うもの」との解釈に大いに触発されたのでした。

……

なによりお礼を申し上げたいことは、青野神学に接したことで、わたしにとって、井上神学（わたしは「アッバ神学」と呼んでいます）の理解が、自分なりに、より深まったということです。

……

青野神学の取り上げ方も、まったく我田引水だとは思いますが、ここまで学んだことから一つ見えてきたのは、「イエスの福音も、そしてパウロの信仰義認論も母性原理にもとづく」ということです。

青野先生が丁寧に論じられているパウロの「十字架の神学」における「信仰義認論」は、井上神父（や遠藤周作）が主張する、「日本人には母性原理の強い宗教が受け入れやすい」——母性原理のイエスの福音ということと大いに響き合う、と思ったのです。

井上神父の主張の根本には、神は厳父のように裁く方ではなく、どこまでも赦す「アッバと呼べる母性原理に基づく神」である、ということがあります。そして日本人にはそのようなキリスト教こそ受け入れやすいものなのだ、と主張しています。

青野先生は「母性—父性」という軸ではあまり語られてはいないと思いますが、「無条件・無制限のゆるし」をイエスやパウロの発見した神の本質と見る点で、大いに井上神学と通じる所があると思ったのです。

こうした解釈は、我田引水かもしれませんが、青野—井上でももちろん異なる点も多いことは知っていますが、私としては、井上神学に接

した時と同じくらい青野神学との出会いが喜ばしいものとなっています。

……

平田栄一様> (二〇一三年十二月二十九日)

○ 母性的福音理解

しばらくして、青野氏からは、次のような返信メールをいただきました。本稿への転載の許可を頂きましたので、抜粋引用します。

<平田栄一さま、

メール、大変嬉しく拝読させていただきました。

たしかに仰るとおり私は「母性－父性」という軸では議論をしてきませんでした。内容的には「母性的」な福音理解をしていると申し上げてよいかと思えます。ですから私の議論の引用も、決定的外れなものなどではないと思えます。

私の書いたものをこのようにしっかりと読んでくださっていることに対して心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

遠藤周作（もう歴史的人物ですので、呼び捨てにしますが）の著作からも影響を受けましたし、井上洋治先生の書かれたものにも共感を抱いてまいりました。

二十年以上も前の話になりますが、井上神父が西南学院大学の宗教強調週間の講師としていらして下さった折に、「青野です」と自己紹介をいたしましたとき、先生がにっこりされて「知っていますよ」と言ってくださったのを昨日のことのよう思い出します。

……

私もぜひ平田さんにお会いしたいものだと思っております。

それではどうぞお元気でよいお働きをなさってくださいますように。

青野太潮> (二〇一四年一月十日)

わたしは、このようなメールをいただいて、縁あって出会った二つ

の神学——井上アッバ神学と青野神学が、種々の相違点——たとえば、新旧約の連続性の問題など——を持つにしても、福音をともに「母性原理」において捉えているということを確認できたのでした。さらに日本人のための霊性＝求道性として、リジューのテレジアに学ぶ「母性原理」を推した井上神父のあの「遺言」（『南無アッバへの道』「あとがきにかえて」参照）が、当を得たものであったことを知り、うれしく思ったのでした。

### ○ イエスの「十字架」と「死」

この連載初期の頃わたしは、井上アッバ神学が、例示した佐古純一郎氏の信仰などと比較したとき、その「ニュアンスの置き方」として「罪の問題よりも苦しみの問題に重点があり」（『心の琴線に触れるイエス』三三頁）、「十字架より復活」（三八頁）あるいは「十字架から復活へ」（四三頁）という特徴があるということ述べました。ただし、「井上神学には十字架がないということにはならない」（三三頁）とも述べました。

それは、イエスの「十字架の死」をわたしたちの罪のための「贖い」や「犠牲」として見る信仰を前提にすると、井上神父がほとんどそれらを語らないことで、一部の牧師さんたちから、「井上神学には十字架がない」と批判されたことへの弁証の気持ち働いていたのだと思います。

青野太潮氏には、ロングセラーになっている『どう読むか、聖書』（朝日選書、一九九四年）をはじめ、パウロの「十字架の神学」を精緻に解き明かす『「十字架の神学」の成立』（ヨルダン社、一九八九年）、『「十字架の神学」の展開』（新教出版社、二〇〇六年）、『「十字架の神学」をめぐって』（新教新書、二〇一一年）という三部作があります。氏はそれらのなかで、「贖罪」—辺倒のこれまでのキリスト教を批判しながら、次のようなことを主張しています。

①キリスト信仰の告白定型としてよく言われる「イエスは十字架の死によってわたしたちの罪を贖った」という言い方は、パウロ書簡を含め、新約聖書の中には一箇所も存在しない。

②パウロは、イエスの「十字架」とその「死」の意味を明確に区別した。すなわち、

③イエスの「死」は伝統的贖罪論へ向かう契機として受け入れたけれども、

④イエスの「十字架」は、直接的には「愚かさ」「弱さ」「つまずき」「(律法による)呪い」を意味し、しかし同時に真の

⑤「賢さ」「強さ」「救い」「祝福」をも、逆説的に意味している。

そしてパウロはまさに現在完了形によって継続する、

⑥「十字架につけられしままなるキリスト」をこそ、自らと信徒の実存の原点として捉えていたということ。そして、

⑦ローマ書四章を中心とする、パウロの「信仰義認論」——「不信心な者」を無条件に義とする——は、パウロ自身による、イエスの十字架解釈であり、

⑧「幸いなるかな」(ルカ六・二〇～二一など)に代表されるイエスの「福音の逆説」とパウロの「十字架の逆説」はぴたりと合致するという、などです。

#### 〇 イエスの「ゆるし」宣言と贖罪死

ちなみに、「十字架」と切り離れたところの、イエスの「死による贖罪」ということを考えたとしてもわたしは、素朴な疑問として常々思っていたことがあります。それは、イエスの(十字架の)死によって、わたしたちの罪が贖われた、という贖罪論と生前のイエスによる罪のゆるし宣言、これはどう関係するのか、という問題です。すなわち、福音書の多くの箇所では、神の子であるイエスの死によって初めて、わたしたちの罪が贖われる、あるいは赦されるということより前に、生前のイエスがストレートに罪人や民衆に「罪のゆるし」を宣言して

おり、この二つの「ゆるし」はどう関係するのか、ということです。

実際、慰め物語や奇跡物語のなかではイエスが、自身の死を語らずに「あなたの罪は赦された（赦されている）」と語っています。たとえば、次のようなイエスの生前の聖句では、

〈はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。〉（『マルコによる福音書』三章二八節）

と明言しています。

神の子であるイエスが、そのように宣言しているのであれば、どうしてそれ以上、自らが十字架に死んで、人々の罪を贖う、償う必要があるのだろうか。まさか、生前のイエスによる「ゆるし」宣言は不十分なものであり、イエスの死によってはじめて「完全な贖い」がなされた、とでも説明するということでしょうか。それはあまりにも「思弁的」であるように思われます。

贖罪論については、神学の長い伝統のなかで、いろいろな説明や解釈が可能なのでしょう。しかし、贖罪論を強調するキリスト教を耳にするたびにわたしは、生前のイエスの「ゆるし」宣言と、伝統的贖罪論との関係に戸惑いを覚える人も多いのではないかと率直に思うのです。

イエスの（十字架の）死の贖罪論的理解は、強くユダヤ教の影響を受けています。青野氏は贖罪について、「旧約聖書以来の伝統を新約聖書も保持している」としつつ、しかし、

〈イエスの発言において「罪の」贖いとしての自らの死が明確に語られている箇所は無い。〉（『岩波キリスト教辞典』五六五頁）

また、

〈イエスが罪のゆるしを宣言されたときには、まさにそこで実際に現実として起こっている罪のゆるしを宣言されたのであり、…十字架の贖罪が完成したとき初めてすべてが完成する、というようなことを、イエスはおっしゃったのではないと思うのです。〉（『十字架の神学』をめぐって』二九頁）

と述べています。

### ○ 日本人の感性

本稿ではすでに、何回か十字架について考えてきました。第一部『心の琴線に触れるイエス』では、「井上神学には十字架がない」のではなく、

〈井上神父は、イエスの十字架を、人間の罪の犠牲（sacrifice）としてよりも、「私たち一人一人の人生の苦しみを」「mitleidenして（共に担って）くれた」もの、あるいは「汚れを取り去った、神との調和を回復した」ものとして受け取って〉（三三頁）

おり、

〈十字架をイエスの共苦的姿勢——悲愛の頂点に位置するものと考えている〉（同）

ということを指摘しました。

十字架を、罪の自覚—イエスの死—贖いという、ユダヤ教に連なる伝統的贖罪論に結びつけることが、キリスト教（とくに西方教会）では当然のこととして受け入れられてきた中で、井上神父は少なくともそのことを第一には取り上げない、否、あえて避けてきたかのように思われるふしがあります。

キリスト教徒にとって、「十字架」は中心的シンボルです。毎日十字を切っています。しかし、それぞれのキリスト者が十字を切るときの思いは、さまざまでしょう。遠藤周作や井上神父にとっては、十字架に直接的な贖い信仰を盛り込むことは、心情的に無理があったのではないのでしょうか。

先の青野氏からの学び③④からいえば、伝統的贖罪論へと向かうイエスの「死」と、イエスの「十字架」を、パウロは明確に区別しました。青野氏は、そもそも「十字架」は初期信仰においては、そのあまりの悲惨さのゆえに贖罪論に直接結びつけられなかったのではないかと推測します。しかし、後の教会は——とくに西方教会はイエスの「死」



と「十字架」を結び付けて、大きく贖罪論に傾いていきます。それはおそらく、時間の経過のなかで「十字架」の直接的な悲惨さ、むごたらしさが風化され、抽象化して「贖罪」という、ユダヤ教からの教義に溶け込んでいったためと思われる。これは、どんなに大きな災害や戦争の記憶も、世代を下ると風化していくという過程と似ています。

井上神父や遠藤は、そうした経緯とは別に、おそらくは日本人の感性の問題として、「十字架」に「犠牲」や「贖罪」を読み込むことに、大きな抵抗を覚えたのだと思います。それが証拠に、井上神父の著した三十冊近くの本のなかで、積極的に「贖い」や「贖罪」に言及した箇所は、ほとんどありません。この言葉すらめったに出てきません。

また遠藤も、次のように言います。

く…それは一言で言うと、西欧の基督教のなかには日本人の感覚に馴染みにくい何かがあって、その何かは結局は日本人たちを西欧基督教から、いつか離していったのではないだろうか。

…

そのうち重要なものを…あげる…

(一) 生贄という観念は、日本人の感覚には薄いこと。

周知のように、西欧の基督教の教義（主としてパウロ神学）にはイエスが十字架にかかったのは、原罪による人間の神からの断絶を救うためであり、また彼は人間のすべての罪を背負い死んでいったという考えが含まれている。

この後者の考えはイエスをいつか、我々の罪を引き受けた「身代わりの小羊」のイメージで見えるようになった。そのイメージは基督教を生んだユダヤ教の過越の祭りで、それぞれの家族の罪を飼っている羊に托し、その羊を神殿で殺す習慣からも生まれたのであろう。

だが、この遊牧民族に特有の祭儀のイメージは日本人にはあまりにもなまなましく、烈しすぎるのだ。…農耕民族の日本人は神に獣や人間を捧げるといった感覚は稀薄な民族である。その稀薄な感覚ではイエスが人の罪を背負った生贄となってくれたという考え方には、あまり

に辛く、どうしても距離感をもつのは当然だろう。>（遠藤周作監修・佐藤陽二編『キリスト教ハンドブック 改訂版』三省堂、二〇〇九年、巻頭エッセイ「日本人と基督教」九～一〇頁）

このあと遠藤は、イエス処刑について、かくれ切支丹たちによって「変形が行われた」独特の解釈を紹介し、

<やはり西欧基督教の生贄としてのイエスのイメージが、日本人の宗教観に馴染めなかったのではないか。身がわりの小羊の役としてのイエスを神が受け入れたという考えは理屈としては理解できても、日本人の深層意識ではなかなか実感となりにくいのではないか。>（一一頁）

と、日本人が西欧の基督教になじみにくい「何か」の筆頭に、この「生贄」＝犠牲――贖罪論的キリスト教を上げています。

ちなみに遠藤は（二）として、

<西欧基督教における神と人間との存在関係の教義が、日本人の深層心理にはつかみにくい点>

を、さらに（三）として、

<ユダヤ教、基督教の神のなかの裁き、罰し、怒りの顔は、日本人の宗教意識には向いていないこと>

を上げています。

これらも、井上神父が常々問題にしていたことと一致します。それにしても第一の問題として、贖罪につながる生贄思想を上げていることは、重要な問題提起と言わざるを得ません。（つづく）

#### 新刊・平田栄一著『「南無アッバ」への道』

本連載第三部、『ルカによる福音書』一八書<「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ>をめぐる考察から、少しずつ見えてくる、イエスのまなざし。そのまなざしにゆだねることにより悲愛へと導かれる、日本人キリスト者・求道者の生き方を模索します。（聖母文庫、定価800円＋税）

◎青野太潮先生からのコメント「何箇所かに私へのご言及があって大変嬉しく思いました。大変よく書かれていて感心いたしました。おまとめになるのはそれなりに大変なことですが、ほんとうにご苦労さまでした。井上洋治先生もお喜びのことでしょうと確信しております。」